日本文学全集

39

武田麟太郎
坂口安吾
織田作之助

新潮社版

日本文学全集　39

武田麟太郎・坂口安吾
織田作之助

発行／1967年9月15日十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／東洋印刷株式会社　製本所／大日本製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1967

目次

武田麟太郎

日本三文オペラ　七
銀座八丁　二七
一の酉　一〇九
大凶の籤　一二七
雪の話　一四五
心境　一五三

坂口安吾

風博士　一六三
盗まれた手紙の話　一七一
古都　二〇七
白痴　二二七
風と光と二十の私と　二三三
青鬼の褌を洗う女　二七一

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

織田作之助
夫婦善哉　三一九
表彰　三五三
六白金星　三六七
アド・バルーン　三八九
世相　四一九
競馬　四五七

注解　四七一
年譜　四八一
解説　佐々木基一　五〇三

武田麟太郎

日本三文オペラ

白い雲。ぽっかり広告軽気球が二つ三つ空中に浮いている。——東京の高層な石造建築の角度のうちに見られて、これらが陽の工合でキラキラと銀鼠色に光っている有様は、近代的な都市風景だと人は云っている。よろしい。我々はその「天勝大奇術」又は「何々カフェー何日開店」とならべられた四角い赤や青の広告文字をたどって下りて行こう。歩いている人々には見えないが、その下には一本の綱が垂れさがっていて、風に大様に揺れている。これが我々を導いてくれるだろう。すると、我々は思いがけない——もちろん、広告軽気球がどこから昇っているかなぞと考えて見たりする暇は誰にもないが——それでも、ハイカラな球とは似つかない、汚い雨ざらしの物干台に到着する。

浅草公園の裏口、田原町の交番の前を西へ折れて少しばかり行くと、廃寺になったまま、空地として取残された場所がある。数多くの墓石は倒れて土に埋まっていい、その間に青い雑草がのぞいているのが、古い卒塔婆を利用して作った垣の隙間から見られる。さらに眼を転じると、この荒れた墓地に向ってひどく傾斜した三階建の家屋に気がつくだろう。——軽気球の繋がれているのは、この三階の物干台で、朝と夕方には、縞銘仙の筒っぽの着物を着たここの主人が蒼白い顔を現して操作を行う。即ち、彼は、萎んだ軽気球が水素ガスを吹込まれると満足げに脹れあがって、大きな影を落しながら、ゆるゆると昇って行くのを眺めたり、太綱を巻いて引くと屋根一ぱいにひっかかりそうになって下りて来るのを、たぐり寄せたりするのである。

云うまでもなく、これがこの四十すぎの男の本職ではない。東京空中宣伝会社から、こちらの地域の代理人として幾ばくかの手当は受取り、それも彼の重要な収入になっているのだろうが、表向の商売は別にあるし、その他多くの副業も営んでいるのである。——

墓地から我々の見た彼の三階建の家は裏側に当って

いるので、表の方へ廻って彼の店を見るならば、彼が日に二合ずつの牛乳を呑むに拘らず、乾燥した皮膚をして、兎のように赤い眼の玉をキョロキョロさせ、身体中から垢の臭を発散させている理由も、何だか了解できるような気がするだろう。それ程、彼の店は陰気で埃っぽく不衛生である。動いたことのない古物が——鍋釜、麦程帽子、靴、琴、鏡、ボンボン時計、火鉢、玩具、ソロバン、弓、油絵、雑誌その他が古ぼけて、黄色く脂じみて、黴に腐っている。唯、これらの雑然とした道具と道具との狭い間を生き生きと動いているのは、主人の子供たちだけである。——細君はやはり赤茶けた栄養の悪い髪の毛を束ね、雀斑だらけの疲労した表情をしているが、恐しく多産で年子に困っている。かつて、あるテキヤに口説かれたことがあったが、そして、もう少しのところで誘惑されて了うところであったが、彼女は思いとどまって次のように言訳をした程である。——自分は関係するとテキメンに子供を産む性質だから、後になってこのことが露顕するかもしれない、その時には足腰の立たぬ位ぶん撲られて追い出され、食べ物にも困り、しかし、あなたは浮気な色事師だから世話なんぞ見てはくれまい、そんな結果を思うとどうしてもできない、と断ったのであった。

——主人は他に周旋業、日歩貸等もやっている。この後者のために、新聞の朝刊三行案内欄に「手軽金融あずま商会」の広告を出しているが、これは貸出の回収不能なんかで手間取るよりもと、簡単に「調査料」詐取の方法を採っている。即ち申込者から、普通一円、市外二円の割で、信用担保等の調査料を取立てるのであって、その調査の結果は、御融通できないと云うことになるのである。それは貸さない口実を見つけ出すための調査料のような観を呈している。——たとえば、担保の有無、保証人の信用工合、細君が入籍してあるか、子供があるかなぞの中にその口実は幾らでもころがっていたし、条件が揃っていても、現住所にどれ程いますかとの問いに、哀れな申込者が六カ月と答えれば、商会では一年以上同一場所に居住している人でないと貸出さないと云い、よしんば一年以上であっても、いや二カ年以下の御家庭は困るのですと——何とでも理由はつけて、調査料を捲きあげ得られるの

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

である。

以上の二つの副業が、この主人の全体としては陰鬱な表情のうちで、眼だけを生き生きとしたものにしている。赤い瞳であるが、これを上眼使いにしょっちゅう動かす時に、白眼がチラチラと冷く光るのである。調査に出かける場合にはどんな遠いところでも自転車に乗って行き、脂じみた朴歯の下駄で鈍重に動作し、ぼつりぼつりともの云って口数も少い。ところが、家に帰って来ると、実にキビキビとして、一階から三階の間を馳け廻り、部屋々々の様子をうかがって、逢う人ごとに如才なく弁舌を振うのである。——これは、彼のもう一つの副業がしからしめているのであって、すでに想像できるように、彼の三階建の家屋はアパートとして経営されているのである。

三階は、細君がお神楽三階は縁起が悪いと反対したのを押切って、あとから建て増されたものだ。このことは主人の金の貯って来たのを語ると共に、我々が墓地側から望む時、この家が傾いているように見え、また、土の焜炉や瀬戸引の洗面器、時には枯れた鉢植の置かれてある部屋々々の窓が規則正しく配列されてなくて、大小三つある物干台と一しょに雑然と乱暴に積み重ねたような印象を与えられる原因をなしている。

アパートと云っても——いや、そんな何となく小綺麗で、設備のよくととのった西洋くさい貸部屋を意味する言葉を使ってはいけないだろう。何故かと云えば、卒塔婆の破れ垣の横を通ってその入口に達すると「あずまアパート」と書いた木札がかかっていて、ちゃんと、アパートではないとことわっている。

そこで、このアパートが普通の下宿屋乃至木賃宿とそんなにちがったものでないと云っても、あやしむことなく理解されるだろう。それでも、下の入口の下駄箱の側にはスリッパが——アパートの主人はこれをスレッパと呼んでいる——乱雑にぬぎすてられてあるし、廊下の両側の部屋には、褐色のワニス塗りのドアがついていい、中からも外からも鍵がかけられるようになっていて、幾分西洋くさいアパートに近づこうとはしている。けれども一旦部屋にはいると、部屋の境目がどう云うわけか、襖やガラス障子でくぎられているので——もちろん、これらは釘で打ちつけられてあけ閉ててきぬようにはしてあるが、お互いの生活は半ば

丸出しと云ってよいのである。畳も壁も、それから乾からびてしょっちゅう割れる音のしている柱も、人間の色んな液汁が染みこんでいて汚く悪臭を発散している。表通に自動車が警笛をならして走るたびに部屋の振動するのは云うまでもなく、べとべとしていて足裏に埃のいやにくっつく廊下や階段を誰かが歩いただけで、部屋全体が響けるのである。

油虫の多い炊事場は、二階階段の上り端に、便所と隣りあってあるが、流しもとは狭くて水道栓は一つ、ガス焜炉は二つしかないので、支度時には混雑して、立って空くのを待っていなければならない。

こんな不潔で不便でも、貸賃が安く、交通に都合がよいので、大抵の部屋はふさがっているようだ。六畳が十円で、ガス、水道、電燈料が一円五十銭——合計十一円五十銭の前家賃になっている。多くは浅草公園に職を持っているのであるが、彼らの借室人としての性質はどんなものであるか。

彼らはその家賃が部屋の設備からして高いと考えている。できれば値下すべきであり、殊に最近の不景気で以前と同じ金を取るのはひどいと考える。そして、そのことは一人一人で交渉するよりも、全体としてアパートの主人に談合すべきであると考える。——ある夜、多くの者たちは十二時すぎまで仕事があるので、一時頃から三時頃までもかかって、協議して一円の値下を要求することに決めた。そして翌日は晦日になっているのだが、誰も払わずに、交渉を引受けた小肥りの映画説明者の返答を待つことになった。ところが、翌朝早く、主人は部屋々々を起して廻って部屋代を取立てた。誰か昨夜のことを彼に告げたものがあったのだろうが、皆も申合せを忘れたように、主人の剣幕に恐れをなして払うのであった。そのくせ、お互いにはそんなことをしたとは顔色にも出さず、知らぬ顔でいた。——朝寝坊の説明者は次から次へとひっきりなしに電話に呼出されるので出て見ると、決定を裏切ったものたちが、実は昨夜あの仲間にはいると云ったが、あの時はすでに家賃は払ってあったんで、と云った風な見え透いた言訳を出先きからするのであった。そこで説明者も独りでは力もないし、主人に憎まれても仕方がないと、彼も亦、定額を支払ったのである。

——そんな彼らであるので、共同生活の訓練は少し

もない。掃除番が順次に廻ってくるのであるが、炊事場でも、それから夏を除いては隔日に立てられる風呂でも、出来るだけ汚くしようとしているようにさえ見える。野菜の切れはしや、魚の骨や塵芥はそこいらにちらばっているし、風呂なんかは二三人はいると、白い垢や石鹸の糟が皮膚にくっつく程浮いて小便臭くなって了う。他の部屋に要事があって入る時も、ノックなしにドアを突然あけるし、鍵のこわれている便所なぞも平気で扉を押し開いて、先に入ってうずくまっているものを狼狽させたりする。

そのうちでも、最もうるさいのは、暇のある女たちだろう。その中心には、吉原遊廓の牛太郎の女房が二人いて、彼女たちは昼は亭主がいるので部屋に閉じこもっているが、夜はお互いの部屋を菓子鉢を提げて行き来し、女たちを集めて晩くまで噂ばなしに時をすごすのである。部屋の前には女のスリッパや草履が重なりあって、彼女たちの高い笑い声はどこの部屋にあっても聞くことができる。

最近の彼女たちの話題は、六十すぎの爺さんと婆さんとの恋愛はどんな風に行われ得るかと云うことであるらしい。――その婆さんはずっと以前から、三階の一号室に住んでいるが、そこへ近頃同年配の老人が亭主として入って来たのである。彼はよほど遠慮深い性質で、婆さんのところへ婿入りしたと云うことが強く頭にあると見えて、いつも帰って来る時には「今日は」とか「今晩は」とか云ってから部屋にはいる。すると婆さんはやさしい声で、

「何ですか、自分の家へもどってくるのに、今晩は、と云う人がどこの世界にありますか。唯今、とか、今帰ったよとかおっしゃい」と叱っているのが、部屋の外まで洩れてくる。それに対して爺さんは、

「うん」と幸福そうに答えて、女の子のために土産に買って来た食べ物なり、遊び道具をそこへ置くのである。――七つになってこの四月から小学校にあがっているその子供は、婆さんの妹の私生児で、養育を託されているのである。

それでも次の日はやっぱり爺さんは、

「今晩は」とそっと部屋に入って来、婆さんは同じ苦情を繰りかえす。随分永い間、この対話は二人の間に飽かず続けられているのが、女たちの噂ばなしで笑い

の種になっているが、何もおかしがることはないのである。

彼らは義太夫の寄席で知合になった。婆さんはそこで仲売の女として働いているので、爺さんは竹本駒若と云う義太夫語りが好きで毎晩聴きに出かけているうち、お互いに馴染みあって了った。

そこで、爺さんはそれまでいた息子の家を中学生のような昂奮と決心とで、少しばかりの小遣銭を持って、飛出して婆さんのところへやって来たわけである。

息子の家にいるのが彼の苦痛であったのは、何も息子夫婦が彼を虐待したからでもなく、物質的に苦労させたからでもない。それどころか、彼らは老人をいたわり、豊富に着せ、食わせていた。何故ならば、息子は仲買人であって長距離のも含めて電話を三本も持っているような物持であったからだ。だけれど、爺さんには何か物足りないものがあった。嫁は亭主の父親としてつくしてくれるだけではないか。それにはむしろ利己的なものがある。息子は仕事にかまけて、金に追われている。老人が生活のうちに欲しいものは誰も考えてくれず、与えてもくれない。それは愛情であった。

その親身な愛情を彼は今、最近の知合の他人のうちに見つけ出している。彼はその中に浸り、気持の結ぼれを揉みほぐしている。

婆さんも彼を得たことを悦んでいる。そこで、つらいことではあろうが、爺さんがあんなにも好きな義太夫の寄席へも、ひょっとして息子の家から探しに来ないものでもないと、断然行くことを禁じて了った。そして、日本物の活動写真か、布ぎれ一枚だけが舞台装置である安歌舞伎を見ることを彼にすすめるのであるが、爺さんも、そのことをもっともと思って、子供の遊び友だちになってやったり、それが寝て了うと、公園をぶらりと歩いて日本酒を一本だけ飲んで帰ると云う風である。そして、横びんからつづいて銀色のヒゲのはえている顔を、首すじまでも真赤にして、今晩は、とおとなしく部屋に入って来るのである。

女の子が学校へ行くようになってから、朝早く起きる必要があるので、彼は考えて眼ざまし時計を買って来た。それは、指定の時刻が来ると、「煙*も見えず雲

もなく」をうたい出す小型のものである。——それを、七時のところに眼ざましの針を廻していると、茶を入れてのんでいた婆さんは云うのであった。

その言葉は若い女が情夫に対して云うような意味合のもので、どんなことがあっても、自分たちから離れないでくれ、しかし、息子さんは探偵を使って私たちのところにあなたがいることを嗅ぎつけることができるかも知れぬ、それが私は心配だ、と云ったのである。

「家から迎えに来ても帰らない？　爺さん、本当に帰っちゃダメですよ」と、艶のある声で云ったのである。

すると、爺さんは、自分が今どんなに居心地よくいるかと云うことを語って、決して帰宅はしない、死水はこちらでとって貰う決心でいると云ってきかせた。そして、近頃は新聞を見ても広告欄には全然眼を触れないように努めている。何故かと云えば、そこに「父居所を知らせ」とかその他の巧い文句で彼を探す広告が出ていたら、魔がさして、こちらを離れて了わないものでもないからである、と附加えるのであった。

これらの対話は、聞耳を立てていたヒステリーの牛太郎の女房が、次の爺さんの述懐と婆さんの同情と共に、みんなに披露して、哄笑したのであるが、何もおかしがることはないのである。

婆さんは爺さんの今までの女との交渉なぞを質問したりした。爺さんは淡泊に答えて、三十の時に女房に死別れてからは、余り接触がないと云って、婆さんを安心させた。その女房は「早発性何とか云う気違いになってね、狂い死しましたがね。医者はあまり気苦労がすぎたからだと云ってたが。——当時、わたしたちの貧乏は随分はげしかったので、貧乏があいつを殺したんでしょう、きっと」

この言葉が終るか終らぬうちに、爺さんは驚かされて了った。隣りの部屋できいていた牛太郎の女房も驚いた、と云った。それは、突然、婆さんが泣き出したからであった。婆さんは泣きながら云った。

「わかりますよ、わかりますよ」それから嗚咽で声を震わせて——「貧乏がすぎて気が狂って、それで若死して——お神さんの気持も、その時のあなたの気持も、わたしにはよく分りますよ」

それから二人とも黙って了った。爺さんは階下にわざわざ下りて行くのが大変なので、蒲団の裾の方に尿瓶が置いてあるが、そこで小便をした。それから、褐色の斑点の出来ている太い腕を拱いて横になったが、——そのまま、永い間眠れなかった。

爺さんは眼ざといので、いつも六時前にはさめるのであった。だから、本当を云えば、眼ざまし時計などは要らないのである。しかし、彼は窓際から射して来る白々とした朝の光のうちに、枕もとの時計の針が廻って七時になるのを待っていた。もう追っつけうたい出すぞ、と考えていると、チクタクの音を消して、突然、時計は陽気に「煙も見えず、雲もなく」と音楽を奏しはじめた。爺さんは安心したような表情で、横に枕を外して寝ている女の子を揺り動かした。

「さア、チイ坊や、時計がうたってるから起きるんだよ、チイ坊、お起きよ、学校だよ」と、朝で痰がのどにたまっているので、皺嗄れた声を出して、彼は云った。

ちょうど、この時刻に隣り部屋の女房は寝つく習慣なのであるが、毎朝、眼ざまし時計に眠りを妨げられることになって了った。もちろん、今までにだって、彼女の昼寝をかき乱すものがあったのである。それは四号室の蓄音器である。

そこにはカフェーの女給が情夫と一しょに住んでいるのだが、男はしょっちゅう家をあけて他処に寝泊りしている。それは他に女をこしらえるからである。

女は店に出る前にきっと数枚のレコードをかけてきく。よほどの音楽好きと見えるが、それもゆっくり聴き楽しむと云う風には見えない。一枚を半分ばかりでよすと、次には騒々しいのをかけて見、それも途中でよして、他のとかえると云った有様である。彼女はいらいらするので音楽を聴き、そのために一層いらいらし出すようである。だから、暇のある女房たちが——ほら、ヒスがはじまったよ、と云うのも当っていないこともない。

男は呉服物のせり売りの桜*をやっている。色事師で——ニキビが少し眼立つが、色白の好い男である。アパートの主人の細君に云い寄ったのはこの男だ。あの場合は、奇妙な理由から失敗したが、そんなことは今までに殆どなかったと云ってよい。しかし、如何して

试读结束：需要全本请在线购买： www.er